

## 家庭の経済状態による教育費負担と進路選択の格差

——中学生と母親パネル調査 (JLPS-J) データを用いた分析 (5) ——

新潟大学 古田 和久

### 1 目的

出身階層によって、教育機会の格差が存在することはよく知られている。格差のメカニズムのなかでも経済的要因に対する関心は高い。実際、親が子どもの教育費を工面する様子が示されるとともに、親による負担が限界に近づき大学進学機会の格差が拡大するのではないかと懸念されてきた。しかし、進路選択に関する研究の多くは高校生を対象としており、世帯年収などの情報を得ることが難しかった。また、家庭の経済状態が進路選択に影響するとしても、経済的制約が高校卒業直前になって顕在化するのか、あるいはもっと早い時点で進路を水路付けるのかは明らかではなかった。本報告は中学生と母親を対象とした調査から、家庭の経済状態に関する詳細な情報を得ることにより、経済的資源が進路選択に影響するメカニズムについて検討する。

### 2 データと変数

使用するデータは、「中学生と母親パネル調査 (JLPS-J)」である。本調査は、2015年10月から2016年1月に全国の中学生とその母親を対象に実施されたものであり、家庭背景および進路選択に関する豊富な情報が含まれる (N=1,859, 有効回収率 45.0%)。分析する主な変数は次の通りである。出身階層の指標は、世帯年収、貯蓄、親学歴である。次に、教育費負担の認識として、高校・大学進学の経済的負担感 (「入学から卒業までの経済的負担が大きい」)、支出に関する認識 (「後々の返済が必要なので、返済が必要な奨学金や教育ローンは利用したくない」, 「子どもが大学に進学する場合、親が学費を負担するのは当然である」) を用いた。さらに、これらの変数が進路の見通しにどのように影響するかを探るために、教育期待の変数も利用した。

### 3 分析

全体では教育費が重いと認識する者が多いが、近年の動向を踏まえれば、過重な負担を認識しながらも貯蓄等から捻出する親、奨学金利用を念頭に置いて大学進学を想定する親子など、複数の費用負担タイプが存在するはずである。そこで母親の意識構造を潜在クラス分析によって探った。結果、負担は小さく親負担規範を持つタイプ (「負担小・親」)、負担がとくに大きく奨学金利用に積極的なタイプ (「負担過大・奨学金」) に加え、負担感は大きい親負担規範が強いタイプ (「負担大・親」)、負担感は大きく奨学金利用に積極的なタイプ (「負担大・奨学金」) の、4つのタイプが観察された。続いて、出身階層とこうした意識タイプとの関係を探ったところ、例えば「負担大・奨学金」と「負担大・親」との違いには貯蓄の影響があること、などが明らかとなった。さらに、出身階層を統制してもなお、「負担過大・奨学金」タイプでは教育期待が低いなど、意識タイプによって将来の見通しに差異が生じていた。

### 4 結論

以上から、家庭の経済的資源が費用負担感や進路の見通しに影響することが明らかである。中学生も同様の分析を行ったが、経済状態が負担感等に影響する度合いは母親よりも小さかった。親は年収や貯蓄を具体的に把握できるのに対し、子どもは間接的にしか知ることができないため、進路選択に伴う経済的費用についても現実感が弱く、親子間で齟齬が生じる可能性もある。

付記 本研究は JSPS 科研費 15H05397, 15K17379 の助成を受けたものです。